便のウを添へたるなり。これをつかねていへば、ソンジョウとなるなり。ナニガシと云ふ意なり。ソンジョウソレと云は、ナニガシクレガシと重ねいふにおなじ心ばへなり。

○『平家』巻十 頸渡の條に「其外はそんぢやう其御頸其御頸と申ければ」 チャはショとかくべし。上に音便あれば、濁りてジョと云ふこと勿論なり。

○ソレと云をソとのみ云は、ソヨダニオモヘなど云詞のソ也。下にそへたるウはヤヤと云ふ詞をヤウヤウとウの音便を添へたると同例なり。拗音を用ひしは、消をケともキエとも云ふにおなじ格なり。ソンジョウソレは『源氏』夕顔のナニガシクレガシとあると同格なり。

（言霊 九の三三丁）

参考

『俚言集覽』愚案の説に、『そんじようその考。『義殘後覺』玄妙院人衆途中より逃崩條、「やがて若大衆談合してソンジャウ其百姓幾人、ソンジャウ誰の百姓、何十人など組合せて」 又『敦盛草紙』『大友興廢記』『地藏舞狂言』カサノシタともいふ。

愚案、ソンジョソレとも云。ソンジョソコとも云。某所其所歟。『節用集』某丈某とあり。丈なればヂャウの假字、所なればショウの假字なり。『醒睡笑』ソンデウソレとあり。皆證としがたし。『小町踊』春上「梅みねど香にしるやソンジャウ園の梅」素朝』といへり。

たいだいし

たいだいし

一 タイダイシ

一 藤原伊行・源 光行 『河海抄』國文注釋全書本一九頁 に 『退々

水原、奥入、』と注せり。

藤原公條の『細流抄』國文注釋全書本、二八四頁　賀茂眞淵の『源氏物語新釋』全集第五の四四五六頁　等いづれも、退々の義とせり。

契沖（源註拾遺國文注釋全書本一六三頁）は『退々の字心得がたし』といひ、村田春海（假字拾要）も『退々と云語有べき事ともおぼえず』といへり。

二　四辻善成　退々水原、奥入、此字不審也。たえ〳〵斷しき意歟。あいうえおの五字通ずる也。

（河海抄國文注釋全書本、一九頁）

牡丹花肖柏が『弄花抄』卷一の一三丁　の說また同じ。宗碩の『藻鹽草』卷二〇の九丁　にも『たい〳〵しき　たえ〳〵しきと云心也』とあり。

三　契沖　たい〳〵しきわざかな　此物語の中に、此詞おほし。いづこに有をみるにも、大事といふにかよひて聞ゆれば、大々（ダイ〳〵）しきにて濁りてよむべきにや。

（源註拾遺國文注釋全書本、一六三頁）

五井純禎の『源語梯』中の六丁にも、『大の字にて、大事と云ことをゆるやかにいへるなるべし』といへり。

四　橘千蔭　『狹衣』にたゆ〳〵といへるも、編者いふ、卷一下の三七丁にあり。このたい〳〵と同語にて音語にはあらじ。

（源氏物語新釋全集本、四五八〇頁）

村田春海この說を贊し、『假字拾要』に、『此語たゆ〳〵しきを云意となしては、いづこも能叶へり』といひ、清水濱臣の『語林類葉』また　タユ〳〵シの轉とせり。

五　本居宣長　たい〳〵しき　こはもと、たみ〳〵しといひけむを、音便にて、ミをイといひなせる詞なり。たみたみしとは、「舌たみて」・「詞たみて」などいふタミにて、直からず横さまにゆがめるやうの意なり。『萬葉』に回・轉（タミ）など書て、まがれる道を、たみたる道などよめり。

…」より「いみじくわろし」までを「文雄云」として

六　石川雅望

（玉の小櫛全集第五の一二五七頁）

たゆみ〳〵しきなり。怠りたゆむこゝろなり。

（雅語譯解）

七　中島廣足

たい〳〵し　此語をおほくとりならべみるに、いづれもことのおこたりなほざりなる意にて、さてあるまじき事にもうつりいへるやうなれば、怠々しの字音なるべし。

（増補雅言集覽）

井上文雄の『冠注大和物語』下の九九丁に『宣長のたみ〳〵しきにて物のゆがみたるやうの意也といへるはいみじくわろし。此語をおほくとりならべみるに、いづれもことのおこたりなほざりなる意にて、さてあるまじき事にもうつりいへるやうなれば、怠々しの字音なるべし』とあり。『増補雅言集覽』には、「宣長の……たいだいし……」より「いみじくわろし」までを「文雄云」として記し、「此語を……」より以下を「廣足云」として記したり。兩者を對照するに一言半句の相違なく眞字・假名また一致せり。

此の語を怠惰の意とせるは、早く中院通勝の『岷江入楚』國文注釋全書本上の五六頁に、『或抄聞書』「退なり又云惰の心也」私云退・怠の心何も可然歟』と見ゆ。

また田中大秀の『竹取物語解』卷の四の三四丁に多くの例をあげて、物を粗略にする意なりと解せるも同意なるべし。

萩原廣道（源氏物語評釋夕顔の卷三五丁）近藤眞琴（ことはのその）物集高見（日本大辭林）落合直文（ことばの泉）等また怠々の說にしたがへり。

此の他、大槻文彥は、『言海』に『たい〳〵し　怠々の音かなど云。訛訛（タミタミ）しの轉にて、横さまにゆがめる意

といふはいかが」と注せり。

二　タヒダヒシ

谷川士清の『倭訓栞』に、『たひ〳〵し』『竹取物語』『大和語』に見えたり」といへり。

◉　参考

山岡俊明の『類聚名物考』第四冊の四五二頁に、『たい〳〵しき』この詞、その意はあざやかにして、そのことわりさだかならず。文字のあつべきなし。退々・大々みな音語なり。ことにあたれりともおもはれず。ことに斷々（タエ）敷は、五音通ふなどいへども、それまたあたれりとも定めがたし。これは『源氏物語』の比の方言なるべければ、今さらその解釋はなしがたし。清て唱ふべし濁るべからず」

たいまつ（松明）

一　タイマツ

一『塵袋』『本書』八の三一丁に「松明（ショウ）をタイマツとよむ。その心如何」『なさしくは、續松とかきたり。訓にはツギマツとよむべきを、ツイマツと云へり。ツイマツの文いひゆがめてタイマツになりたり。假名のキの字をばイと云ふつねの事也。ワキタテをワイタテと云ふが如し。タとツとは通音なれば、ツキマツをタイマツと云等也』

二　貝原篤信　松明（タイマツ）　タキマツ也。イとキと通ず。又ツイマツ共云。ツギマツなり。ツイはツクなり。故に續松ともかく。又手火（タビ）なり。手にもちてともす火なり。『日本紀』神代卷に、秉炬をタビとよめり。手火なり。今も邊鄙の人はタビと云。

（日本釋名　三の三九丁）

代取（ニテ）ニ湯津爪櫛（ノツマクシチ）一牽（ヒキカキテ）ニ折其雄柱（ホトリハチ）一以爲ニ秉炬（タビト）一而見レ之。訓二太比一今

（日本釋名 三の三九丁）

山岡俊明（類聚名物考第五册の六二八頁第六册の七〇六頁）狩谷望之（箋注和名類聚抄卷四の一〇三丁）高橋殘夢（國字定源上の三一丁）寺田長興（太津可豆衛）田沼善一（筆廼靈前篇の二條）大槻文彥（言海）落合直文（詞の泉）等みなタキマツ（燒松）の音便假名にして、イの假名遣なりとせり。

此の他、行阿の『假名文字遣』橘成員の『倭字古今通例全書』市岡猛彥の『雅言假字格』加茂季鷹の『正誤かなつかひ』石川雅望の『雅言集覽』春登の『假字音便撮要』萩原廣道の『心の種』近藤眞琴の『ことはのその』物集高見の『日本大辭林』いづれもイの假名遣なり。

二　タヒマツ

寺島良安　炬音渠　和名抄云、「炬。太天阿加之」今云太比末豆　案『日本紀』神代取ニ湯津爪櫛一牽ニ折其雄柱一以爲ニ秉炬一而見レ之。訓ニ太比一今多用レ松故名ニ太比末豆一

（和漢三才圖會活版本八三九頁）

新井白石（東雅活版本二の二四一頁）谷川士清（倭訓栞）大石千引（言元梯）の說また同じ。

村田春海は『增補古言梯標註』に『手火と燒松は別語也。手火松と云語はあるべからず』といへり。

○

以上諸說の他に、楫取魚彥は『古言梯』に『たいまつ燒松也。續松も同じ。松明』と注し、更に頭書に『日本紀、秉炬。万葉集、手火之光云々。これによれば手火松か』といへり。

たいまつ（松明）

たけなわ(酣)

タケナハ

一　谷川士清　たけなは　闌字をよめり。タケは長也。日のたけてなどいへり。『萬葉集』に「夜はたけにつゝ」とよめるに闌と書り。ナハはナホと通ず。猶の義也。

（倭訓栞）

寺田長興は『太津可豆衛』に士清の説をあげて、『理りいと明らけし』といへり。

二　本居宣長　酣字は「酒樂也」とも「樂酒也」とも、「飲洽也」とも注せり。かくて是を多宜那波と云は、宇多宜那加波の略かりたるにて　初の字を略く例は常に多し。又那加を略きて那と云は、級長津彦神を、志那都比古とも云、天武天皇の大御名の淳中を、書紀の訓注に云「農難」とある類なり。さて終の波は濁るべきなれども、上の宜濁音にて、近く濁の重なる故に、おのづから清て云なれしなるべし。宜は必濁るべし。然るを常に此をも清て云は正しからず。……又タケナハを「日のたけたる」「草などのたけたる」と云タケの義と心得るは非ず。日又草などのタケは、高くなる意にて別言なり。さて「日のたけたる」と云は、古は朝日の高くなれるを云るに、今は誤りて、日の西に傾けるを然云に因て、酣をも酒宴の盛過て、やゝしめりたるほどの如く心得るはひがことなり。然るに此に又いと紛らはしきことあり。史記高祖本紀に、「酒闌」とありて、文穎注に、「闌言レ希也。謂飲レ酒者半罷半在謂二之闌一」と云る此闌をも、タケナハと訓るは、酣と同意と心得誤れる訓なるべし。闌は然訓べき由なければ、俚語もて云ば酒宴の最中此字によりてタケナハの意を誤ること勿れ。と云ことなり。

（古事記傳全集第二の一六〇六頁）

三　橘守部　酣は、日代宮段に、「盛樂故臨其酣時」また、甕栗宮段に「盛樂酒酣」など見ゆ。多氣とは、「朝日の高くなる」又「藝術に長る」又山の登る極を「嵩」など云と同くて、凡て物の盛に至盡るを云が本義なるを、「年のたくる」「秋たくる」「夜のたくる」「草のたくる」などやうに、盛過てやゝ末に成ゆくをも、云ことなりつるは轉用にて、「進む」と「荒む」との類也。故此酣字を、常に多氣那波と訓も、長ナハルにて、遅くなるを於曾那波流など云類なり。盛に至るよしなり。字書にも「酣飲洽也」と註したるをも

思ふべし。傳の釋に宇多宜那加婆の略りたるなりと云て、多宜那波と宜を濁りたるもひが事なり。然か多言を略くべきにあらず。又さ

思ふべし。傳の釋に宇多宜那加婆の略りたるなりと云て、多宜那波と宜を濁りたるもひが事なり。然か多言を略くべきにあらず。又さては、多宜那婆と婆をこそ濁るべきに、清みてのみ唱へ來しは然らざるあかしなりかし。○編者いふ、鐘の響（下の九九丁）にも同意の說あり。

（稜威言別 四の五二丁）

楫取魚彥が『古言梯』に『たけなは　タケは高也。ナハは辭』と註し、飯田武鄕が『日本書紀通釋』第二の一一六七頁に『多氣は長なり。那波は長けゆくそのさまを云辭にて、「日のたくる」「月のたけゆく」「夜のたけなは」などみな殆半に及ぶさまを云なり』と解き、大槻文彥の『言海』に『タケは長くる意。ナハは形狀の語』といへる、いづれも守部の說と同じきが如し。

四　『俚言集覽』　酒タケナハとは酒の深たるにて長たる義也。俗に長じたりと云。ナハとは中間の義也。卽長中間の義也。

たじろく（辟易）

たじろく（辟易）

一　タヂロク

一　行阿　たぢろき　とゞろき同事歟。五音通ずる故也。展々轟動。

二　賀茂眞淵　たぢろき　たちしりぞく義なるを、轉用してすゝむにもしりぞくにも身うごかしといふ事にいへり。今俗にいふソブリなり。動きさわぐなり。

（原中最秘抄　經濟雜誌社本　羣書類從第一一輯の　三九二頁）

（源氏物語新釋全集第五の四四九八頁）

山岡俊明も『宇津保物語二阿鈔』國文注釋全書本、四八六頁に『たぢろく　立退の略語にて、足もとの定まらでうごくをいふ』と注せり。

三　大石千引　避退立除。

橘　成員の『倭字古今通例全書』鈴木　朖の『雅語譯解』萩原廣道の『心の種』等またヂの假名遣とせり。（言　元　梯）

二　タジロク

（倭　訓　栞）

一　谷川士清　たじろく　『源氏』『うつぼ』に見えたり。常もいへり。立退の義成べし。リソ反ロ也。辟易の字をよむべし。

寺田長興（太津可豆衛）　物集高見（かなづかひ教科書）此の説によれり。

二　村田春海　たじろき　『堀川百首』に「朝夕につたふいたゞの橋なればけたさへたえてたじろきにけり」此語、ミジロキのシロキと同じ意にて動く事を云。『萬葉』に目の動く事を万志呂久と有。編者いふ、萬葉集に見あたらず。刊行本新撰字鏡（上の一三丁）に「瞠　万志呂久」とあるを誤れるなるべし。チの略にて、たちうごくの意也。

はやく契沖も、『和字正濫鈔』五の二九丁に『たじろく假名もいまだ考がへねど、ミジロクといふ言もあれば、タヂロクにはあらじと思ひてこゝに出す』といへり。

また清水濱臣も『タヂロクの假字とするは誤か。『新撰字鏡』に「瞠　万志呂久」とあるをおもふべし。タは上にそへし助辭にてシロクは動の字なり。ミジログは身動、マジログは目動也』といへるよし『增補雅言集覽』に見えたり。

三　『俚言集覽』愚案　たじろく　愚按、タジ〳〵といふ言もあり。タジロクは手退歟。シロクは引を訓す。シログの條通看すべし。編者いふ、しろぐの條に、「しろぐ　遊仙窟、頓引○引字をマシロク、又眼引をマシロクとあれば、シログは引意にて卽シリゾクなるべし。リソの反ロ、故にシログといふ。マシログは眼の動き轉じて引く事なり」とあり。チの假字極非

なり。

一　大石千引　太和志（タワシ）　撓（タワシ）。稾撓・椶撓の類。

なり。

四　大槻文彥　たじろく　タは發語。シロクは退く意。身ジロク目ジロクなど同じ。（言海）

此の他、佐藤誠實も『語學指南』に『たじろく　退轉。退きて其所を去るなり』といひ、本居宣長（御國詞活用抄第一會）石川雅望（雅言集覽）近藤眞琴（ことはのその）物集高見（日本大辭林）落合直文（ことばの泉）小田清雄（國語かなつかひ早學）笹村良昌（假字の栞）等またジの假名遣とせり。

たわし（器物を洗ふもの）

一　タワシ

たわし（器物を洗ふもの）

一　大石千引　太和志（タワシ）　撓（タワシ）。稾撓・椶撓の類。（言元梯）

二　内田儀八　たわし　束藁子。三語をひとつのことばのやうに呼べるもの。（かなづかひ集成）

二　タハシ

高橋五郎の『いろは辭典』に『たはし　把稿。刈茅・棕櫚等にて作りて物を磨き洗ふに用ふる者』　物集高見の『日本大辭林』にも『たはし　把稿。わらなどのみじかくきりてつかねたるもの』と注し、落合直文の『ことばの泉』またハの假名遣とせり。

三　未定

『俚言集覽』に『藁をたばねて結ひ物洗ふ器をタハシと

云。ハの字未詳』といへり。

たわやすし(容易)

タハヤスシ

一　賀茂眞淵　たはやすき　手觸易(タフラヤスキ)にて、本は手をふれやすき物をいふ。……布良(フラ)の反波(ハ)なるを、良と禮と通へば、不禮易き意となるなり。只ハを助辭なりといふ說は、ハを略してタヤスキと云を覺えて、不意に思へる物なり。かゝる所にハを助辭に置たる例を見ず。みだりに添べからぬ事なり。

（源氏物語新釋全集第五の四六三六頁）

二　谷川士清　たはやすく　『源氏』にみゆ。『日本紀』に輒をよめり。「每事卽然也」と注せり。ハは助語。タヤスク也。

（倭訓栞）

はやく四辻善成の『河海抄』國文注釋全書本八五頁に『たはやすき　たやすきといふ詞に、文字をそへていへるなり。定家卿說也』とあり。

田中大秀も『竹取翁物語解』一の一六丁に『容易(ヤスク)と云に多(タ)を發語におき、波(ハ)を助辭とせるなり。故波(カレハ)字なくても云り』といへり。

たわら(俵)

一　タワラ

一　貝原篤信　俵(タワラ)ツ、ムワラ也。ツとタと通ず。ツムを略す。米をつゝむわら也。

（松屋筆記國書刊行會本第一の二九四頁）

を略す。米をつゝむわら也。

（日本釋名三の四〇丁）

二　寺島良安

太字一　俵音標　俗云太和良　苞藁（ツトワラ）也　豆止二字通ニ

（和漢三才圖會活版本五五六頁）

三　谷川士清

俵をよめり。田藁の義にや。今俵子ともいへり。……○藤原秀郷を俵藤太といふは不經の俗說也。本居、大和の田原也といへり。

（倭訓栞）

物集高見（日本大辭林）　落合直文（詞の泉）ともに此の說によれり。

四　小山田與清

俵の字『延喜式』をはじめ、古書に多く見えてタワラと訓り。タワラは束藁（タバネワラ）の略語にて藁を束て物を裹納るゆゑの名也。されどタワラは古語ともおもはれねば古くは俵の字をツト・ニへなどゝや訓たりけん。可ㇾ考。

たわら（俵）

（松屋筆記國書刊行會本第一の二九四頁）

『成形圖說』卷一四の二丁にも『俵は和字なり。蓋把稈（タバネワラ）の畧歟。一說に田稈（タワラ）也』といひ、

大島正健の『國語假名遣新法』林甕臣の『日本語原の研究』五〇頁等また束藁（タバネワラ）の義にてワの假名なりとせり。

二　タハラ

一　『俚言集覽』　たはら　俵を訓り。此假字未詳。……『定家假字遣』タハラ。『前太平記』「將門は米かみよりぞ射られける田原藤太がはかりごとにて」今姑く此假字に從ふ。

二　敷田年治　たはら俵　『字鏡集』『色葉字類抄』等に、「俵（タハラ）」と注し、藤原秀郷を『尊卑分脈』に、「俵藤太」とあるを、『帝王編年記』に「田原藤太」に作れり。

卽大和國の地名也。俵を龍神より賜(ハ)るの俗說は信(ウケ)がたけれど、田原・俵相通じ書けるを以て、假名を知(ル)。しかるに俵を草(タ)包(ハラ)に當(ッ)るの非なることを、『和爾雅』に辨(ヘ)たれど、『四時祭式』及『類聚三代格』等に既(ク)見えたり。

（音韻啓蒙下の五〇丁）

三　大槻文彥　たはら　束藁(タバワラ)の略か。田原藤太を俵藤太に通ぜり。

（言　海）

中村秋香の『中學音訓かなづかひ』に、『束藁(タバワラ)の約にてタハラなりといふ說然るべくや』といへり。

此の他、大石千引は『言元梯』に『俵苞藁(タハラツトハラ)』と注し、行阿の『假名文字遣』四二丁　橘成員の『倭字古今通例全書』石川雅望の『雅言集覽』近藤眞琴の『ことはのその』またハの假名遣とせり。

『俚言集覽』にもちやうの部に挑灯とあり。

三　未定　契沖の『和字正濫鈔』四の二四丁に『俵　たわら　眞名は光定の『一心戒文』又『延喜式』にあり假名は未考』といへり。加茂季鷹の『正誤かなつかひ』にも『たわら　『延喜式』假字未詳』と注せり。

ちようちん（提燈）

一　チヤウチン

一　行譽　灯呂(トウロ)をアントンチヤウチンなんど云文字如何。

挑灯(チヤウチン)と書てチヤウチンとよみ、行灯(アントン)をアントンとよむ皆唐音歟。

（塵　嚢　鈔三の四丁）

『俚言集覽』にもちやうの部に挑灯とあり。

二　山岡俊明　ちやうちん　燈灯。『秋夜長物語』「れいの童さきに立て、きよなふのてうちんに螢を入てともしたり。その光りかすかなるに」てうちん　思ふに古へきかず。俗には燈灯と書く。これは唐などに有る紗燈なり。きよなふはなにの事にや未考。

唐山にては提灯と書く。今の唐韻にてはテウテンなるをテンとチンとはつねにまぎるゝ音なるによて、テウをチヤウといひテンをチンといへるなり。又一本を見るにとうろと有るをよしとすべし。ちやうちんは後人のよみ誤りなるべし。

（類聚名物考第五册の六二五頁）

松岡行義は『後松日記』百家説林續編中の七七一頁に提燈の字を用ゐ、假名にはちやうちんと記し、

物集高見の『日本大辭林』また『ちやうちん　提灯』と記せり。

二　テウチン

一　橘成員　てうちん　挑灯。又張燈とも。

（倭字古今通例全書）

二　荻生徂徠　てうちんは吊灯なり。挑灯とかくは僻事なり。つるべも吊瓶也。

（南留別志五の二一丁）

三　貝原好古　提燈言挑灯也。懸火同。

（和爾雅五の二四丁）

四　槇島昭武　提燈一名張燈太平御覽懸火　挑燈俗用ルハ此字ヲ謬乎。

（合類大節用集卷七の二九丁）

五　伊藤長胤　『名物六帖』器財箋四の四〇丁に『懸火正字通楚辭有懸火一卽宋以來之提鐙』○提鐙見レ上ニ　○提燈行厨集、提者曰ニ提燈一』また『同書』人品箋五の一丁に『提燈籠的水滸傳、那箇提燈籠的莊客』

ちやうちん（提燈）

此の他、谷川士清の『倭訓栞』に『てうちん』『行厨集』に提燈といへる是也』と注し、寺島良安の『和漢三才圖會』活版本五三一頁越谷秀眞の『物類稱呼』四の八丁いづれも提燈をテウチンと訓せり。

また伊勢貞丈の『四季草』秋、道具の部『貞丈雜記』故實叢書本卷三の三一〇頁等には挑灯の字を用ゐ假名にはてうちんと記せり。

三　チヤウチン・テウチン

大槻文彥『言海』ちやうちんの條に『ちやうちん提燈。或は挑燈（テウチン）。字の唐音の轉』と注し、てうちんの條に『てうちん　挑燈。唐音。提燈（チヤウチン）に同じ』と注せり。

落合直文の『詞の泉』の説また同じ。

◉　參考

一　齋藤彥麿の『傍廂』百家説林正編上の三七八頁に『挑灯は後世のものなれば、論に及ばずといへども、挑は字書に「往來貌」ともあればさてありなん』編者いふ、「行燈は坐席にあれば字義かなはず。挑灯は他行の爲なれば字義かなはず。互に入れかへてよし」と或人の云へるにつきての説なり。行燈と挑燈とを取り違へたりとの説ははやく橘成員の倭字古今通例全書に見えたり。

岡本保孝の『傍廂糾繆』況齋叢書三八の一六丁に彥麿の説を駁して、『字書とは何をさすにか。提とかくべし』といへり。

二　『岡本先生隨筆』二六丁に『挑燈の字面ふるくは西土にては用語なりしを、今は本邦にては體語となりて挑燈と云もの世々一般に用ふるなり。いまだ其起りをしらず』『下學集』に燈籠・行燈・挑燈とみえたり。『白氏』卷十九、夏夜宿直「寂寞挑燈坐沈吟蹋月行」同卷秋房夜「挑盡殘燈秋長夜」かの長恨歌の「孤燈挑盡未成眠」とあるは用語なり。亦『武林舊事』卷二公主下降「燭籠二十提燈二十」

三　安井息軒の『睡餘漫筆』八丁に『チヤウチン　アンドンも唐音の訛れる也。挑燈は燈の心を前にかき出すことにて物

の名にあらず。生物知（ナマモノシリ）の心得違ひで付し名なり。行燈をチ‖ンともいへるをしるべし。『唐話纂要』卷「挑灯　ツリドウ」

の名にあらず。生物知（ナマモンシリ）の心得違ひで付し名なり。行燈をチヤウチンの事と心得たる人あれども、是も亦誤りなり。總て漢土の燈は置付なり。夫ゆへ座中を持あるく燈を行燈と云ふ。編者いふ、貞丈雜記（故實叢書本、卷三の三一〇頁）に「行燈の事。古は夜道を行く時持つ燈也。さればユクトモシビと書くなり。鎌倉年中行事に鎌倉殿（足利殿の御代也）の正月五日、管領のもとへ參給ふ行列を記して、續松二丁行燈一つもたすべし。とあり……」といへり。チヤウチンは燭籠と書くべし。燈毬は燭籠中に燈を點ぜし也」

四 『日本社會字彙』に「朝野群載（卷四）應德二年十月三十日法定院佛聖供ニ灯油料ニ狀に云、「安ニ置佛像之前ニ無ニ挑灯柱ニ云々」ここに挑灯とあるは、灯爐なるべけれど、かくふるき物に、此字面あるはめづらし。『下學集』『蘆囊抄』等には挑灯の字をチヤウチンとよめり。『蘆囊鈔』（文安三年撰）「灯呂をアンドン・チヤウチンなんど云文字如何。答、挑灯と書てチヤウチンとよみ、行灯をアンドンとよむ皆唐音歟。行の字をアンとよむ事、行在・行者等也」かくいへるにて此書をつくれる文安のころは、灯呂をさしてアンドンともチヤウチンともいへるをしるべし。『唐話纂要』（卷五）「挑灯（ツリドウロウ）」とあれば、チヤウチンはもと灯爐をさしていへる唐音のこにうつれる也。今のチヤウチンには提灯の字あたれり」

ちようばみ（調食）

一 テウバミ

一 伴信友 てうばみ 調食。信云、『異本枕草子』（心ゆく物）「すぐろくはてうばみ」又「てうばみうつに上手めきて、手はたてたるてう（調）どもうちしきりてやがてみなかけとられたる」

（增補語林倭訓栞）

小山田與清の『松屋筆記』（國書刊行會本第一の一六一頁）にいはく、

「物の數の調半の字を今は丁半（チヤウハン）とも長半（チヤウハン）とも書くは借

字也。調半と書べし。調はトトノフ義。半はハシタの義也。定家卿『愚秘抄』に調半の字を書れたり』といへり。

二　物集高見

てうばみ　調食。すぐろくのあそび。雙六なれば丁食（チャウバミ）にて假字もチャウなるべくおもはるれど、今はテウとかきなれたるをもてあらためず。編者いふ、ちやうの條に「ちやう　丁。雙六の目の、ふたつにわかつべきかず」とあり。

（日本大辭林）

落合直文（ことばの泉）の說また同じ。鈴木弘恭の『增補枕草子春曙抄』上の二六丁に『てうは賽の目の丁也』と注し、テウの假名とせり。

三　チヨウバミ

谷川士清

『倭訓栞』に『ちようばみ』『枕草紙』に「はぐろめよくつきたる。ちようばみにちよう多くうちたる」と見えたり。重食の義。ト食のハミに同じ。双六の采なり』と見え、

『同書』ちようはんの條に、『ちようはん　奇偶の數をいへり。重半と書けり。俗に云ふ重日・半日を西土にて雙日・隻日といへり。『百練抄』に「依ニ御遺誡一不レ被レ憚ニ重日」と見えたり』といへり。

『清少納言枕草紙抄』國文注釋全書本三四八頁に、「てうばみ　双六のこと也。今東國ニてうはみとて打也。テウとは重目（テウメ）の事也』といひ、岡西惟中の『枕草紙旁註』國文注釋全書本、五九頁にも重食の字をあててテウバミと書し、バは休め字也といへり。

喜多村信節は『嬉遊笑覽』存採叢書本、八の三頁に『枕草子』に、心ゆくものの內に、「てうばみにてうおほくうちたる」と有。これ又雙六の遊びにて偶數を勝とする也。今のおりはのたぐひか』といひ、おりはの條同丁に

『撮壤集』なる雙六下貼重墩（オリノコシテウハン）のハンと傍點あるは誤にて、『枕雙紙』なるてうばみなるを音便にミをはねたるならん』といへり。

以上テウバミと書したれど重の假名はチョウなれば士清と同じくチョウバミの假名遣說なりといふべし。

○

以上諸說の他に、北村季吟は、『枕草子春曙抄』二の一五丁に『てふばみ　重食（テウバミ）。調食（テウバミ）。双六のあそび也』と注せり。

ちようろぎ（草石蠶）

一　テウロギ

谷川士清　てうろぎ　草石蠶をいふ。朝露葱の義にちようろぎ（草石蠶）

や。其根の連珠せるをもて名を得たるなるべし。

（倭訓栞）

二　チヤウロギ

平野必大の『本朝食鑑』卷三の三五丁に『知也宇呂岐。卽草石蠶。一名甘露子。古來未ㇾ聞ㇾ有近世華舶移ㇾ種』

寺島良安の『和漢三才圖會』活版本一八七四頁にも『草石蠶。甘露子・地蠶・土踊・滴露・地瓜兒。知也宇呂木』とあり。

三　チヨウロギ

槇島昭武の『合類大節用集』六上の六丁に『草石蠶（チョウロギ）』大槻文彥の『言海』に『ちようろぎ　草石蠶　朝露葱（テウロギ）の義かともいふいかが……ちようろぎ』とみえ、落合直文の『ことばの泉』にもチョウロギの假名遣とし、物集高見の『日本大辭林』にはチョロギとあり。

つ　い　じ（土塀）

一　ツイヂ

一　契沖　ついぢと云はついひぢの略なるを俗に築地と書なして此心也と思へるは誤れり。

（勢語臆斷元の二一丁）

二　荷田春滿　童子問、『闕疑抄』云「つゐひぢをつゐぢと讀也。つゐんぢと少し持心有てよむべし」との御說有。つゐぢといふを嫌故也と。しかりや。

答、先に問に、よみてをよんでとよむならひをいふごとく、ついひぢをついんぢとよむは、ひをはぬるならひ也。つゐんぢと少持心有てよむべしとは、五音第二の音轉をしり給はぬ故也。暫つゐぢのかなは、ッイと書べし。『和名抄』に築垣を豆以比知と有をも一證とすべし。築はツキなりキの音をイにかよはす事常の例なり。

（伊勢物語童子問第一の五〇丁）

三　狩谷望之　『和名抄』築墻の條の箋注に『按、豆以比知築土也。或急呼二都以治一見二枕冊子一』といへり。

（箋注倭名類聚抄卷三の三五丁）

澤田名垂の『家屋雜考』百家說林正編下の二六〇頁にも、『築墻（ツイヂ ツイガキ）築埆といふ事なるを、音便にてツイヂ・ツイガキ・ツイガイなどよぶなり』とあり。

大槻文彥（言海）落合直文（詞の泉）もツイヒヂのヒの約せられたるものとせり。

此の他、行阿の『假名文字遣』三〇丁　橘成員の『倭字古今通例全書』山岡俊明の『類聚名物考』第五冊の二六三頁　藤井高尙の『松の落葉』百家說林續編上の七九五頁　石川雅望の『雅言集覽』

近藤眞琴の『ことはのその』及び物集高見（日本大辭『俚言集覽』つがふする　手筈する事をツガフスル

近藤眞琴の『ことはのその』及び物集高見（日本大辭林）『俚言集覽』等、いづれもイの假名遣とせり。

一　ツヒヂ

一　谷川士清　ついひぢ　『倭名抄』に築牆をよめり。築塀也。今ツヒヂといふは中略也。俗に築地といふは非ず。（倭訓栞）

二　田中大秀　つひぢは諸本ついぢとあり。是は本築土（ツキヒヂ）なるを、ツヒヂと云はキ字を略するなり。ツイヂとは書べからず。（竹取翁物語解卷五の二一丁）

つごう（都合）

ツガフ

つごう（都合）　つじ（辻）

『俚言集覽』　つがふする　手筈する事をツガフスルと云。都合を書は、總計を都合と云に、混じたる也。番字正義也。

大槻文彦の『言海』に「つがふ　都合。手番（テツガヒ）の略轉にて字は假借なりと云。手筈を調ふること」といへり。

つじ（辻）

一　ツジ

一　契沖　辻　つじ　旋毛をも俗にツジといへば、辻もツムジにて通ずべし。文字は十字の意にて、和俗の作れるにや。（和字正濫鈔五の三〇丁）

寺島良安（和漢三才圖會活版本二三四頁）　谷川士清（倭訓栞）山岡俊明（類聚名物考第一册の四九頁）『俚言集覽』の愚按、大槻文彥（言海）の說いづれも、旋毛（ツムジ）と通じて、ツムジなるを、ムを省略せるものとせり。

狩谷望之は『倭名抄』に「十字　『吳均行路難』云、縱横十字成ニ阡陌一今字十字者東西南北相分之道。其中央似ニ十字一也俗用ニ辻字一本文未詳。」とあるに注して『下總本無ニ本文二字一、有ニ都无之三字一。今俗呼ニ都之一』といへり。

（箋注倭名類聚抄卷三の五一丁）

二　中山信名

辻の假名は常にはツヂなりと思へる人もあるは誤也。溫古堂に藏せる古本の『宇都保物語』の俊蔭の卷に「人にもあらぬ心地して、見めぐらしてつしに立玉へり云々」又「三條京極のつしに立玉へり云々」ともあり何れも辻の事也。印本には共にツチに直したり。シとチとは至て近き音にて通用せるからに、ツヂなりと思ひ誤る人もあるなるべし。シ・チの通用せる證古今少からず。穿邑（ウガチ）の兄ウカシ・弟ウカシ日本紀古事記　天地をアメツシ道をミシ萬葉集東歌　常陸（ヒタチ）の古事を漬（ヒタシ）の義とし　久慈（クジ）の古事を鯨鯢（クヂ）とし　大櫛（オホクシ）の古事を大朽（オホクチ）の義とし常陸風土記　辰孫王を智宗王とし辰爾を智仁に作る類甚多し。姓氏錄續日本紀　今も上野・武藏邊の人には、道をミシと云者まゝあり。又蛇に山カヾチとよべるものあるを、山カヾシとも云へり。今の世も京師の人は辻の事をヅシと云て辻子の二字を用る事也。シ・チの音古今通用せる證かくの如し。されば、ツジをツヂと思へるも、音の至て近かりし故の誤なるべければ、オ・ヲのたがひ、エ・ヘのたがひなどと同樣にはあらず。おのづから通用せしこともあるにやしらず。

（中山信名隨筆抄錄七丁）

三　或傳說

大田　覃の『一話一言』卷一五の三七丁に、「辻と云る字、十文字に辻（シ）遶かけたるやうにかく。此字も和字

也。これは四辻は十文字の如くあるにより、昔十字と書たといへれば、辻も豆志の假字なるべし。編者いふ、同氏の日本大辭林を見しに、「つじ」

也。これは四辻は十文字の如くあるにより、昔十字と書たるを、假名にて字の字をかき、それをすぐにシネフのやうに書たる也。十字唐音にてツンの音也。それゆゑツンジと書たる字也。唐詩に「十字街頭吹尺八」とあるも此事也。これ有來る說この通り也」といへり。

伴　蒿蹊の『閑田耕筆』四の三五丁にも或人話とて、「辻といふ字、此方にて作れるは誰もしれり。然るに辻と書は義なし。十字街の事にて、十しといふ假名を一字になしたるなり。『四辻殿略譜』にも辻と書る。若又辻とかけるは、辻はしに同じとぞ」とあり。山崎美成の『海錄』六の一丁に「此の說おもしろき考なり」といへり。

荻生徂來の『南留別志』卷一の三丁には「辻は逵の草書なるべし」といへり。

四　物集高見　つじ　此假字古書に見えず。されども『字鏡』に艶䟽を阿乎彌豆志牟とよみて、高くなるを豆志牟といへれば、辻も豆志の假字なるべし。編者いふ、同氏の日本大辭林を見れば、「つじむ腫。はる。はれあがる。ふくれあがる」とあり。

（かなづかひ教科書）

橘　成員の『倭字古今通例全書』加茂季鷹の『正誤かなつかひ』石川雅望の『雅言集覽』近藤眞琴の『ことばのその』落合直文の『ことばの泉』等ジの假名遣とせり。

二　ツヂ

一　松永貞德　辻　つぢ。ツはつどふ也。チは路也。

（和句解二の二四丁）

高橋殘夢も『國字定源』中の二八丁に『筋・辻のヂは皆路なり』と注せり。

二　大田　覃　和詞にものゝあつまる肝要の處をも津と云。辻と云も、よりあつまる地と云事なるも不ゝ知それゆへ

十字と書てツヂと唱るならん歟。

（一話一言巻一五の三七丁）

三　ツヂ・ツジ

貝原篤信『日本釋名』一の二二丁に『衢（ツヂ）かたゝにゆく道ある所をツヂと云。ツとはつどふ也。あつまる也。チはみち也。アツのツと道のチをとりて上下を略す。あつまるみち也。ツジともかく。チとシと通ず』といへり。

つずらおり（九折）

一　ツヾラヲリ

一　楫取魚彦　つゞらをり　葛（ツヾラ）折也。九折。

（古言梯）

二　谷川士清　つゞらをり　馬を御するに、何遍も馬を引廻す式あり。是を葛折といふ。『名目抄』にもしか書せり。編者いふ、羣書類從本（經濟雜誌社本第一六輯の一〇九六頁）に「葛折（ツヾラオリ）御幸之時、馬打樣」とあり。葛を折が如くに、折返し〳〵する意也。近江の高宮と越智川の間に、ツヾラ折村あり。ツヾラ行李を多く作る○九折坂をツヾラヲリの道といふも義同じ。吉野郡の村名に、九尾をツヾラヲとよめり。

（倭訓栞）

本居宣長も『玉の小櫛』（全集第五の一三〇八頁）に『つゞらをりをれまがりたるさまの、黒葛（ツヾラ）の蔓のさまに似たるよりいふ名なるべし』と解し、大槻文彦（言海）落合直文（詞の泉）また葛折の義とせり。

三　大石千引

九折（ツヾラヲリ）。繼連折（ツヾラヲリ）

（言元梯）

此の他、行阿の『假名文字遣』三丁をはじめ、契沖（和字

正濫鈔（三の一丁）　市岡猛彦（雅言假字格）　加茂季鷹（正誤かなつかひ）　春登（假字音便撮要）　清水濱臣（語林類葉）　石川雅望（雅言集覽）　萩原廣道（心の種）『俚言集覽』　近藤眞琴（ことはのその）　物集高見（日本大辭林）等みなツヾラヲリの假名遣とせり。

二　ツヾラオリ

一　山岡俊明　九折坂　つゞらおり。盤坂。九折坂を今ツヾラオリといふ。馬の騎方など習はせることなり。ツラ〳〵オリの略語なるべし。

（類聚名物考第二册の二〇二頁）

二　小山田與清　信友曰、『伊勢物語』に「もゝとせに一年たらぬつくも髪云々」ことはもとつゝもなりけんを寫誤れるなるべし。若狹の海にツヽモといふ藻あり。今のホダハラと云物の事也。一ふさの貌（サマ）長さは二三尺ばかりにも成て、莖も枝もいとほそく連りて、髪を垂亂したるごとく海中にある時は色黑くいさゝか黄ばみたるが、かわきたるは薄く黄になる也。そはいかにも老嫗の髪のたれみだれたるにたとへつべき物なれば、つゝも髪といへるなるべし。…

さてツヽとは物のいま少し滿足はぬやうの事にいへり。手業の足りとゝのはざるを、手筒と云も、『紫日記』『長明無名抄』に見ゆ。『宇治拾遺』に「口手つゝ」と有も、轉りて口語のたりとゝのはぬにいへりと見ゆ。又若き人の年齒を、ツヾハタチばかりといふも、十九（ツヾ）カ廿といへること也。十九にかぎりてツヽと云にはあらず。こは廿（ハタチ）を地（モト）として、其二十に滿足らぬをいふ詞づかひ也。地名にも大和吉野郡九尾（ツヾラヲ）　越前敦賀郡筒を、其地より出せる布を、古文書に九十布（ツヽヌノ）など書たり。『字鏡』に玄孫をツヽコとあるも、脉（ツヾキ）のへだゝりて親みのやゝとほくたらぬにいへり。又ツヽム・ツヽシム・ツヾマヤカ・ツヽシルなどいへるツヽも、物事を滿

つずらおり（九折）

て足はせざる義ときこえたり。俗言にツヽ一杯といへるも、滿足らぬにいふと云々。（編者いふ、信友の說は比古婆衣（存採叢書本）六の七四丁に出でたり。）

與清按に此說よろし。ツヽシルといふも、物を十分にくはぬ貌、ツヽシリウタフも十分にうたはぬ貌、ツヽグレも薄暮にて未暮了らぬほど也。ツヾリ・ツヾレなども、不足なる物をとり集るよりいふ。九折坂をツヾラオリといふも、ツは登りおほせぬさま、登らんとして背（ウシロ）ざまへおりらるゝより云なるべし。『六帖』二（卅八丁オ）寺の歌に「さゝ浪やしがの山道のつゞらおりくる人たえてかれやしぬらん」此歌に「おり下（ク）り來（ク）る人」とよせてよめり。……オリをヲリと書はひがごと也。

（松屋筆記國書刊行會本第一の一三六頁）

此の他、五井純禎が『源語梯』（中の一七丁）に『つゞらおり　九折とも羊腸とも書り。葛（ツヾラ）のまとへる如く、まがりて下る坂也』といへり。

橘　成員もオの假名と定め、『倭字古今通例全書』に、『つゞらおり　九折（文選には盤折の二字を訓す）』といへり。

つわる（熟）

ツハル

谷川士清　つはり　『倭名鈔』に擇食をよめり。惡阻ともいへば、衝張の義なるべし。……○梅の熟してつゑるを、つはるともいふ。潰張の義成べし。『徒然草』にも「下よりきざしつはるにたへずして」といふ詞見えたり。『金葉集』に　たゞならぬ人のもてかへしてと有けるに、子をうみてけるがもとより、うみたる梅をおこせたりければよめる「葉がくれにつはると見えしほどもなくこはうみ梅になりにけるかな」

と う（薹）　（倭訓栞）

タウ

一　槇島昭武　薹（タウ）。『本草』「米嚢（ケシ）三四月抽レ薹」又云、「羊蹄（シノネ）入レ夏起レ薹」

（合類大節用集巻六の一三丁）

二　谷川士清　たう　草のたうのたつなどいふ。薹の音轉也。又塔の九輪などに似たればいふにや。さらばタフと書べし。

（倭訓栞）

大槻文彦（言海）も『たう　薹の音便と云、或云塔（タフ）の音』といひ、物集高見（日本大辭林、ふきのたうの條）落合直文（ことばの泉）も薹の字を書せり。

『俚言集覽』たうにたつの條に、『倭訓栞』の說をあげ、『愚按、『季瓊日錄』布直垂地紫紋桐塔と見えたり』といへるは塔の義とせるにや。

また大石千引は『言元梯』に『薹（タウ）頭（トウ）』と注せり。

どう さ（礬水）

ダウサ

一　谷川士清　だうさ　礬水をいふ。にかは地とも見えたり。今膠礬などもて造り成せり。……○染色にだうさを入るなどいふは明礬なるべし。ダウスともいへり。

（倭訓栞）

物集高見の『日本大辭林』『増補俚言集覽』の増補

等ダウサの假名遣とせり。

二　ドウサ

大槻文彥　どうさ　礬水。明礬の蘭語ドウスの轉と云ふ。原字詳ならず。又ドウス　（言海）

三　ダウサ・ドウサ

落合直文の『ことばの泉』だうさの條に『だうさ　礬沙』　どうさの條に『どうさ　礬水』とあげ、いづれも「明礬を膠に溶したるもの」と注せり。

四　未定

『俚言集覽』に『どうさ　假名未詳○『犬子集』朧月夜にむかひて「空に一重礬石紙をや春の月」

とうじ(酒を釀すもの)

トウジ

一　貝原好古　酒杜氏(サカトウジ)。魏武帝短歌行曰(ニ)慨當(テ)以慷(ニ)憂思難(レ)忘何以解(カン)(レ)憂惟(チ)有(ニ)杜康(ク)註謂杜康(ハ)古之造(レ)酒者(ナ)以(レ)此(ナ)今俗亦稱(メ)釀(レ)酒者(ナ)爲(ニ)酒杜氏(トシ)。編者いふ、杜氏を延べて、トウジと云りとの說なるべし。（和爾雅　卷三の八丁）

慈延の『隣女唔言』下の四七丁に『酒をつくる人をとうしといふ。杜康酒を作るにたくみなり。よりて杜氏(トウシ)といふ心なるべしとある人にかたれば、番匠のかしらを、棟梁といふ。柳子厚の梓人傳に云、都料匠といふ人あり。みづから匠具をとらず、たゞ諸匠に指揮して、家を建しむ。棟札をあぐるにおよびて、都料匠造之とかけ

り。とうやうは、けだし都料をとなへあやまれるなるべし。とこたへき。よき對語なりき」といひ、佐々木高貞の『閑窓瑣談』四の二二丁 また杜氏の義とし物集高見の『日本大辭林』にも杜氏と記せり。

二 槇島昭武 『洞兒(トウジ)。酒家ノ奴隷ヲ曰ニ洞兒ト一今按漢ニ有ニ洞馬官ノ一作レ酒事詳ニ勻會ニ』 『杜氏(トウジ)。或用ハ此字ヲ一蓋據ニ杜康カ舊名ニ云云』

（合類大節用集 巻四の七丁）

三 新井白石 世に酒造りて商ふものゝ家にて、酒造る事をしる者をトウジといふもの、また刀自なり。むかし造酒司に、大刀自・小刀自・次刀自とて、三つの酒造る壺ありけり。その大刀自は酒三石計いりしもの也。後に酒造る人をもよびて、刀自といひしは、ふるくより云ひつぎし詞なり。かの造酒司の刀自は、三條の院の御時、大風に彼司たふれし時に、三つながら、打割りてけりと、舊きものにしるし置きけり。是等の事の如きも、世には、異國の事など附會していふ說ありとぞ聞ゆる。

（東 雅 活版本一の一四〇頁）

大槻文彥の『言海』に『とうじ 造酒司、酒甕神に、大邑刀自・小邑刀自あり。又其酒壺に、大トジ・小トジの名あり。これより起れるかと云。或は、支那周代に、杜氏(トウヂ)酒を釀せれば云と云ふはいかゞ。さらば假名遣異なり』といへり。

四 或人の說 酒製(サケツクル)事を司とるものをとうじと云は、一說に、いにしへ藤次郎と云もの、よく酒をつくる。是とうじといふは爰にはじまるといふ。又一說に頭兒(トウジ)と書て、酒家のかしらおとことといふの儀なりと。

（物類稱呼 一の一二丁）

とうじ（酒を釀すもの）

とうち(十市)

一　トホチ

一　契沖　十市　とほち　『和名』　大和國郡名。十は常はトヲなり。地名には常に違へる事おほし。故あるべし。

（和字正濫鈔　三の三七丁）

本居宣長も『古事記傳』（全集第二の一二七三頁）に、『十市は『和名抄』に、「大和國十市郡止保知（トホチ）」これなり。十は登袁（トヲ）なるを止保とあるは假字違へり。地名なればなるべし。されど其はやゝ後の訛にこそあらめ。十字をしも書來（キ）れるは本は登袁とぞ唱へけむ。然れども今は姑く『和名抄』に從（ヒ）て訓つ』といひ、又『同書』（一三六頁）に、十市之入日賣命の十市をトヲチと訓し、さていはく、『和名抄』に大和國十市止保知郡あり。此地に依れるか。十の假字は登袁（トヲ）なるに止保知（トホチ）とあるは地名なればなるべし。凡て地名の假字には尋常（ヨノツネ）に異なることのまゝあるなり。此は常のまゝに登袁（トヲ）と訓つ』といへり。

二　鹿持雅澄　十市は『和名抄』に「大和國十市郡止保知」また『新古今集』に「暮ば速（トク）く往て語らむ會事（アフ）の十市の里の住憂かりしを」とあり。（古今集とあるは拾遺集の誤なるべし。）これは會事の遠（トホ）といひかけたれば、登保の假字なり。○編者いふ、新案に十は登袁の假字なるを、登保（トホ）とあるは違へる如くなれど、本より通はし云るか。又は本は登袁知（トヲチ）なりけむを、後に訛りて登保知（トホチ）と唱へしか。今たしかには定め難し。然れども今は姑く『和名抄』並『新古今集』の歌に從（ヨリ）て訓つ。

（萬葉集古義活字本卷一中の一丁）

山田常典も『增補古言梯標註』に、『拾遺集』の歌の遠にいひかけたるを證としてホの假名とせり。

中嶋廣足も『檀の下枝』（上の九丁）に、『北邊隨筆』云、

『續千載集』宣子「露わけてやどかりごろもいそげども二字に定られしとき、本書來（カキ）れる文字をしひて省しより、文

『續千載集』宣子「露わけてやどかりごろもいそげども里はとほちの野べのゆふぐれ」遠は古はトホ、今トフ。十はトヲなればいづれにてもかよひがたし。といへり。今按に、『拾遺集』雜賀春日の使にまかりてかへりてすなはち女のもとにつかはしける、一條攝政「くればとく行てかたらむあふことのとほちの里のすみうかりしも」これも同じく遠き意にいひかけられたり。そは『和名抄』に「大和國郡名十市止保知」とあれば、ふるくよりしかとなへしなるべし。又「筑前國遠賀郡十市止布知」ともかけり。さればひとり『續千載集』をのみとがむべからず』といへり。但し、『增補雅言集覽』の增補には、『此地名の假字の事、濱臣が『答問雜稿』にくはしくいへるがごとし』とあり。濱臣の說は下に擧ぐべし。

三　村田春海

『若桂』六丁に『地名の文字をひたすら二字に定られしとき、本書來(カキ)れる文字をしひて省しより、文字と訓とかなはぬやうになりたり。されどよくこゝろをやりて見るときは、其ことわり明らか也。假字の違へるにはあらざる也。本は三字なるを省て二字とせしは、勝田加豆万多登米止與米　八部夜多倍　春部加須我倍　などいへる類いと多し。此類唱ふるには、古名のまゝにいひたるのみにて、文字はしかよまるべきことにあらず。

さて十市止保知また十市止布知とあるを見て、十は止乎の假字なるに、あるは止保といひ、或は止布とあるは、假字のたがへるとおもふべけれども、これも三字を二字に省て、名はもとのまゝに唱へし也。止保知は十保市とありし保を省き、止布知は十布市とありし布を省しにて、登與米を登米と略し書たる類也。假字の違ひたるにはあらず。

又その中に一つ二つ傳寫の誤れるもあり。尾間於末とあるは後人の於・乎を同じ事とおもひて書誤れる也。『萬葉』卷

九に、「其津乎指而」と古本に有を、印本には、「其津於指而」とあるなど、全く寫生の誤にて、もと論ある事にはあらず』といひ、なほ十の字をトの假名に用ひし例證をあげて、『神代紀』に十握劒をトツカツルギとよみ、『萬葉』に十方を止毛の假字におほくもちひ、又十年をトヽセ、十丈をトツエと古語にいひ、又トフノスガコモなどもいへれば十を止の假字に用ふることうたがふべからず』といへり。

清水濱臣の『答問雜稿』三の二丁の說は師春海の說に同じく、『續日本紀』和銅六年五月の詔に「畿內七道諸國郡鄕名著ニ好字ニ」と見え、又『延喜式』（民部式）に、「凡諸國部內郡里等名並用ニ二字ニ必取ニ嘉名ニ」とあるを引て、『いにしへは文字にかゝはらず、正字借字かき來れるまゝに通用し、三字にも書たるを、かく定ありての後は、國郡鄕名みな二字に約めたる也』といひ、『其例は、上□（カミツケヌ）野古事記に上毛野とあり。下□（シモツケヌ）野をはじめて、大和郡名磯城（キノ）上下を□城（キノカミ）上之岐乃加美□城下（シモツキノ）之岐乃之毛　葛城（カツラキノ）上下を葛□上（キノカミ）加豆良岐乃加美　葛□下（カツラキノシモ）加豆良岐乃之毛　相模郡名足柄（アシガラノ）上下を足□上（カミ）足辛乃加美足□下（アシカラノシモ）准上○今本和名抄には、足柄上・足柄下と三字にかけれど、これはあやまり也。活字本に足上・足下とあるをよろしとす。とあり。此ほかにも武藏（ムサシ）□國名　但（タジ）□馬國名　美（ミマ）□作（サカ）國名　安宿（アスカベ）□河內郡名　丹（タヂ）□比（ヒ）同上　安八（アハチマ）□美濃郡名　春（カスカ）□部（ベ）尾張郡名　何（イカル）□鹿（カ）丹波郡名　登（トヨ）□米（メ）陸奧郡名　知夫（チブリ）□隱岐郡名　英（アガタ）□太伊勢鄕名　擧（コロモ）□母（モ）三河鄕名　都賀（ツカハ）□石見鄕名　信（シガラキ）□樂近江鄕名　これのみにかぎらねど、大かたにておきつ』と記し、『十市もものとは三字なりけんを中のホにあてし文字をはぶきしものなり』とせり。十をトの假名に用ひし例を擧げたれど春海の引く所と全く同じければ略せり。

岡本保孝、『難波江』百家說林續編下一の六二五頁に、此の說を駁していはく、『我師清水濱臣は和銅六年の詔により、本居氏の『轉用例』編者いふ、地名字音轉用例（全集第四の一〇一一頁）に倣ひて、十は登の假字、保にあたる字は省けるなりといはれき。……師說面白きやうなれどうけとれず。いかにといふに、『古

『事記』孝靈に「十市縣主」とかけり。又崇神「十市之

事記』孝靈に「十市縣主」とかけり。又崇神「十市之入日賣命」とみえたり。和銅六年五月の詔よりはやく、和銅五年正月に奉る『古事記』に十市とあれば、中略の例とはなしがたかるべし。……

師説は何故に『和名抄』をたすけてトホチとせられたらむとおもふに、十市を遠路（トホチ）にそへたる歌の、やゝふるくみゆるよりのことにはあらぬか。今おもふに、やゝふるくみゆる歌も『和名抄』に誤られたるものとさだむべくや。其歌とは、『拾遺集』雜賀。一條攝政「くればとく行てかたらん逢事のとほちの里の住みうかりしを」『新古今集』秋下。式子內親王「更けにけり山の端ちかく月をみてとほちの里に衣打聲」……これらなり。すてゝ證とすまじきなり』といへり。

二　トヲチ

どじょう（泥鰍）

笹村良昌　とをち　十市。『和名抄』にトホチ。『拾遺集』に「遇ふ事のとほち」『續千載集』に「里はとほち」とあり。皆誤也。

（假字の栞）

邨岡良弼も『日本地理志料』卷二の三七丁に『十市郡、止保知。按保當レ作レ袁。大同類聚方・竹取物語並作二止袁知郡一。可レ從。伊呂波字類抄十訓二止袁一』といひ、橘成員（倭字古今通例全書）谷川士清（倭訓栞）落合直文（ことばの泉）等もヲの假名遣とせり。また前にあげたる『難波江』の說によりて推すに、岡本保孝も『和名抄』の訓を誤れりとし、ヲの假名遣とせるがごとし。

どじょう（泥鰍）

一　トヂヤウ

一　橘　成員　どぢやう　鰍　『本草』には鰌魚とあり。又泥鰌とかく。俗に土釘とかく。然ども是を訓母とす。（倭字古今通例全書）

二　榊原芳野　『洋々社談』第八號、海泥二鰍の談。に『海鰍嘆じて曰、我と汝と同名なるを以て辱く吊はる。然れども汝は卵生にして淡水に産する魚屬、我は胎生にして鹹水に育する獸類なるは、近來人間も亦知れる所ならずや。而るに汝は泥字を加へ、我は海字を加へて等しく魚類とす。物を辨ぜざるの甚ならずや。泥鰍笑て曰く、請ふ岸頭の酒店を見よ。招牌上に、くじら汁・どぜう汁と並に兩行に書す。是大小の別を知らざるのみならず。汝は久治良にしてクジラに非ず。『古事記』神武の御製以て徴すべし。我は土長にしてドゼウに非ず。『塵添壒囊』の語證するに足れり。已に彼が如く、其名を誤る。何ぞ其實を識るに至らん。文明の世猶文盲の人多し。其これを如何せん』

平野必大（本朝食鑑　卷七の一九丁）　小野蘭山（本草綱目啓蒙　卷四〇の三〇丁）　落合直文（ことばの泉）また『塵添壒囊鈔』に土長とあるに從へり。

狩谷望之は、『箋注倭名類聚抄』卷八の一二丁に、『鰌卽泥鰌。『壒囊鈔』所レ載土長是也。土長卽泥鰌字音之譌』といへり。

三　鈴木忠孝　泥鰍の假名いかゞあるべき。一説ドジャウとす。そは『和漢三才圖會』、五十、魚類、河湖中無鱗魚に「泥鰌、どじやう。泥鰍字音之訛也」とあるによれるなるべし。鰍は『字彙』に鰌の俗字とあり。鰍・鰌ともに、七由切、音シウなり。此説一わたりはさることのやうにも思はるれども、もと泥鰍といふ漢名は、本草家のいふ學名にこそあれ。これによりて一般俗間のとなへ名となれりけむことおぼつかなくやあらむ。さてはまだ、本草の書のここに渡り來ざりし前には、何といひけむ、といぶかし。一説土生（ドジヤウ）の此の他、林　道春の『多識編』四の二丁また登知也字と

り來ざりし前には、何といひけむ、といぶかし。一說土生（ドジヤウ）の字音なりともいへれども、是も亦迂遠の說にやあらむ。さるは世に土中に生ずるもの、必しも泥鰌とのみ限れるにもあらじをや。又一說ドヂヤウとす。是はかの何がし釋氏の『塵添壒囊鈔』に土長の字をあてたるによれるものにて、榊原芳野氏も此說に從へり。されど土中に生ずるも、土中に長ぜむも、同じ程のことなり。信じ難し。『下學集』に土鯲の字をかきたるは據りどころあること歟。捨て難さこともせらる。

おのれ思ふに、ドは必泥（ドロ）といふことにて、その流音を省けるものなることは、必疑なかるべし。さてはチヤウの義いかゞあらむ。此魚强くつかめば、チユウチユウと鳴く。そのこゑによれるにはあらじ歟。こは極めてをさなき考ならめど、こうじはててはかゝることをも思ひつけるなり。

（大八洲 二五の五號）

どじよう（泥鰍）

此の他、林　道春の『多識編』四の二丁また登知也宇と注し、貝原篤信の『大和本草』卷一三の七丁にもトチヤウと訓せり。

二　ドヅヲ・ドヂヲ

小山田與清　今俗に泥鰌をドヂヤウといへり。與清按に、こは泥津魚（ドロヅチ）の義なるべし。されば假名にはドヅヲまたはドヂヲなど書べき也。

（松屋筆記國書刊行會本第一の二五頁）

三　ドジヤウ

一　寺島良安　泥鰌　俗云止之也宇。泥鰍（ディシウノノ）字音之訛也。

（和漢三才圖會活版本七三三頁）

二　谷川士清　『倭訓栞』に「どじやう　泥鰌をいふ。音轉にや。又泥生の音也ともいへり。……鰍は倭の俗字な

り。湖邊の名に柳土生・釘土生などの品あり』といひ、『鋸屑譚』（百家說林正編上の九八九頁）には、『泥鰌。俗土淨とよぶは音の轉訛なり』といへり。

物集高見の『日本大辭林』笹村良昌の『假字の栞』またドジャウの假名遣とせり。

四　ドジョウ

『俚言集覽』　土鰍（トジョウ）　假字未詳。髭ある魚なれば土尉の義歟。然らば尉は丞の義にて、ジョウの假字なり。

五　ドゼウ

大石千引　『言元梯』に『鰌（ドゼウ）泥鬚（ドロゼウ）』

六　未定

大槻文彥の『言海』どぜうの條に、『どぜう　泥鰌。どぢやうの條を見よ』と注し、どぢやうの條に、『どぢやう鰍。』『塵添壒囊鈔』に土長の音を當てたり。或云、泥鰌の音の轉訛かと。或は泥生又土生の音の轉ともいふ。常にドゼウと記すはいかゞ』といへり。

とのい（宿直）

一　トノイ

賀茂眞淵　侍宿爲鴨（トノイスルカモ）。侍宿と書からは、こは殿宿（トノイ）也。然は假字は止乃伊也。後世トノヰと書はおしはかりのわざぞ。

（萬葉　考卷二の二五丁）

楫取魚彥（古言梯）この說に從ひ、谷川士清も、『和訓栞』に『とのい』『日本紀』に宿、『萬葉集』に侍宿を

よめり。殿居（ヰ）にあらず。宿直も同じ。晝に直といひ夜の意にてヰの假字也。若宿の字によりてイの假名也と

よめり。殿居にあらず。宿直も同じ。晝に直といひ夜に宿といふ。『文選』注に「直謂宿禁中以備非常也」と見ゆ。殿寢の義也。寢をイとよめり』とひ、

坂　徵（蜻蛉日記解環國文注釋全書本三七〇頁）　高橋殘夢（國字定源上の三二丁）寺田長興（太津可豆衛）　笹村良昌（假字の栞）等も殿寐の義とせり。

二　トノヰ

『假名文字遣』三六丁に『とのゐ　宿直・殿居』と注せり。

『一歩』にも『とのゐ　宿直　是は番をして居を殿居と書故、宿直とかきても、番をして居事なるにより中のヰの假名を書也』といひ、

本居宣長は『玉の小琴』全集第五の六一五頁に、『侍宿の假字を『萬葉考』にトノイと定められたるはわろし。殿居の意にてヰの假字也。若宿の字によりてイの假名也とせば、トノネとこそ云べけれ。ネとイとは聊意異也。ネは形につきていひ、イは睡眠の方に云也。侍宿は形につきて、殿にてぬるとは云べけれど、殿にて睡眠するとは云べきことに非ず。集中にも宿字は、ヌ又ネには書れどもイにはかゝず。トノヰのヰは居にて、夜殿に居と云こと也。晝をトノヰといはざるは、晝は務ることと有て只には居ぬ物也。夜は務ることなくて只居る故に、夜をトノヰとは云也。さて務ることなき故に、寐もすることなれども、寢るは主とすることには非ず。侍宿は殿に居るを主とすることなる故に、トノヰとは云也。眠るを主としてトノイと云べき由なし』と論じ、

敷田年治は『音韻啓蒙』下の五一丁に『夫木集』廿七なる「深き夜のみ山がくれのとのゐ猿ひとりおとなふ聲のさびしさ」といへる歌を擧げ、『按にとのゐは殿居

とのい（宿直）

にて、俗に云夜番也と聞ゆ。上に引るとのゐ猿も、多くの猿の寐たるに獨り起き居たるよしなり。是を殿寢（トノイ）とせむはわろし』といへり。

貝原篤信（日本釋名二の二三丁）平　直方（夏山雜談一の二一丁）石川雅望（雅言集覽）『俚言集覽』足立稻直（紫式部日記解國文注釋全書本、二七頁）堀　秀成（假字本義考）大槻文彥（言海）、小田淸雄（國語かなつかひ早學）等また殿居の義とし、

村田春海は『增補古言梯標註』に『本居宣長がくはしくいへるによるべし』といひ、鹿持雅澄の『萬葉集古義』活版本卷二下の八七丁にも『玉の小琴』の說を引きてヰの假名を書けり。

又大石千引は『言元梯』に殿寐の義としイの假名遣としたれど、『增註日中行事略解』一六頁には此の說を否定し殿居の義とせり。萩原廣道も『心の種』にはイの假名と定めたれど後に其の說の變じたるなるべし。

『源氏物語評釋』にはヰの假名を記せり。

此の他、橘　成員の『倭字古今通例全書』市岡猛彥の『雅言假字格』加茂季鷹の『正誤かなつかひ』淸水濱臣の『語林類葉』近藤眞琴の『ことはのその』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』等いづれもヰの假名遣とせり。

○

以上諸說の他に、契沖が『和字正濫鈔』二の二二丁に『宿直、とのゐ。殿居なり。侍宿とも』と注し、『和字正濫要略』一六丁には『宿直、とのゐ殿寐（トノイ）也。ゐの假名に非』といへり。後に考へ改めたるにや。

抄』に「かげろふのことを黑さとうばうのちひささや

とんぼう（蜻蛉）

一　トンバウ

（日本釋名二の五二丁）

一　貝原篤信

蜻蛉（カゲロフ）　かける也。飛かける虫也。蜻蛉（トンバウ）は飛羽（トバハ）也。

谷川士清の『倭訓栞』に『とんばう　俗に蜻蛉をいふ。飛羽の義也といへり』とあり。

二　大槻文彥

とんばう　蜻蛉　飛坊（トビバウ）の音便ならむ。或云飛羽の轉と。

（言　海）

此の他、寺島良安の『和漢三才圖會』活版本七六六頁に『蜻蛉總名（ヘ）曰（ニヤ）止牟波宇（トムハウ）。名義未レ考』とあり。

伴　信友も『比古婆衣』百家說林續編中の九五頁に『和歌童蒙抄』に「かげろふのことを黑さとうばうのちひささやうなるものなり」と見えたるごとく　蜻蜓を林逸節用集・新韻集にトハウ本草和名薄抄に止ム波宇又加計呂不。運歩集・撮壤集にトンハウとよみ、塵囊抄に「蜻蛉といふは大小のとんばうの惣名なり」といへり。今なべてとんばうといふものゝ中の一種に云々』と記せるを見ればバウの假名遣說なりしなり。

二　トバフ

（諺草一の五九丁）

貝原好古

蜻蛉（トバフ）　とんぼ又とんぼう並誤。

三　トンボウ

（語林類葉）

清水濱臣

とぼう　蜻蛉。『袖中抄』三十一オ「あきつは蜻也」　○『著聞集』蹴鞠「我一期に此とんぼうがへり一たび也」　○東方の轉音なるべし。

東方の説は、はやく荻生徂徠のいへる所にして、『南留別志』（巻三の二一丁）に『蜻蛉をとんぼうといふは吾邦の名を秋津洲といふゆゑ、東方といふ事なるべし』といへり。

『南留部志の辨』（温知叢書第五編の一六頁）にいはく、『和名抄に胡黎をキエンバといふ。蜻蛉の小にして黄なるなり。赤卒はアカエンバ。蜻蛉の小にして赤きなりといへり。今いふヤンマ又トンボはみな訛れり。東方なりと思ふは、近比の唐をしたひこうじたる人、稱呼をたがへるより出たる意なり。もししひごとせばヤンマはヤマトムシとともいへらんやうなるべし。蜻蛉の形に似たるとは和州のかたちにして、大八洲すべて形の似たるにはあらず』とて徂徠の説を駁せり。

此の他、狩谷望之の『箋注倭名類聚抄』（八の六二丁）蜻蛉の條に『今俗呼二止无保宇一是名見二袖中抄・童蒙抄一』また物集高見の『日本大辭林』に『とんぼう　蜻蛉。『袖中抄』三「あさつとは　とんぼう也云々」』など見え、橘　成員の『倭字古今通例全書』、新井白石の『東雅』（四の五九二頁）山岡俊明の『類聚名物考』（第一冊の七一頁）鹿持雅澄の『萬葉集品物解』（活版本、四の七四丁）等いづれもボウの假名を書せり。また、

大石千引の『言元梯』に『蜻蜓（トンホ）飛炎（トンホ）』と注せり。

四　トンバウ・トンボウ

落合直文の『ことばの泉』とんぼうの條に『とんぼう　蜻蛉』とんばうの條に『とんばう　蜻蛉。とんぼうになじ』とあり。

林　道春の『多識編』（四の九丁）に『蜻蛉　阿元豆牟志。俗云登牟波宇』と注し、蜻蜓を阿於登牟波宇。胡黎を元登牟波宇。赤卒を阿加登牟波宇などと訓せるに、

紺鑿の訓に久呂登牟保宇。馬大頭に於保登牟保宇と

建部綾足は『伊勢物語古意追考』（一三丁）に眞淵の説を